

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十四年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷五号（通卷第二二一号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第221号

9. 2012

祝茶事

品川 鈴子

百客にとどく目礼風炉名残

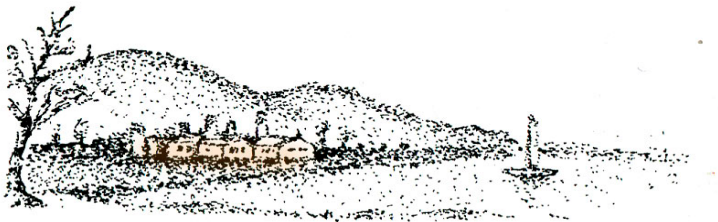
華甲茶事干支の刺繡の秋裕

紅白の萩を脇侍に茶事亭主

台柿の銘を煙管に華甲茶事



時雨傘不用のままに祝茶事
席入りの膝行も試歩秋裕
結納昆布黴かと捨つる勤め妻
折れし趾ゆび縛られしまま休暇果つ
怪我鳩も試歩の連れなる草紅葉
無花果の乳にもかぶれ術後なる



玉

鈴

吟

兵庫 長谷川 鮎

重き首揃うて垂れしひまわり畑
一斉に大向日葵は首切らる
校正をつくつく法師急かし鳴く
入院の手荷物に触るねこじやらし
月まどか絶食中の病院に

愛媛 濱田ヒチエ

山青葉切り端の見ゆる陶石場
麦の秋復路は藁を焼いており
山帰りリュックに卯の花覗かせて
昼に夜夏空仰ぐ天体シヨウ
あれこれと計画倒れ五月尽

大阪 早川周三

納屋奥に百年を^{いくたま}経し武者人形
戦火浴び去りにし生玉あやめ咲く
ふた昔訪れざりし愛染祭
梅雨空に俳聖の連句浮瀬跡に
常宇みなハイテクに変へ若楓

兵庫 林 哲夫

目借時“芭蕉”の話 蜿蜒と
白牡丹父の需めし絵と較べむ
暮敵に負けて古茶飲む二杯飲む
梅雨荒るる昨日も今日も中国史
鏡見て手振り腰振り阿波踊り

兵庫 林 美智

ひとり居に昨夜迅雷容赦なく
釜一杯炊いて冷凍豆御飯
改築のクレーン響く梅雨晴間
早朝のテレビ体操半ズボン
旅立つ子濡れてはならじ夏至の雨

兵庫 平田恵美子

ビニールに入りし朝刊梅雨の入り
振り塩のやや手を高く鱈三尾
サングラスの奥に目の色探りけり
香水や女性車輛を敢へて避け
拍動を電池に委ね昼寝人

愛媛 福島松子

龍の棲む淵の錆色夏兆す
海桐咲く奥に捨て猫丸まりて
古民家の屋根に夏草花付けて
夏帽子街探検の列となり
茂り葉に塚の半面隠される

愛媛 福田かよ子

蛙声湧き出す植田小屋傾ぐ
青林檎揺らして帰る猿群団
苔の花半身死したる樟大樹
風鐸のちぎれんばかり青嵐
遊女墓病葉はりつく小さき石

兵庫 藤井久仁子

朝虹の抱く伯耆と弓ヶ浜
これよりは女人禁制沙羅の花
取り替へるカーテンレール梅雨の人
腸の香や鮎解禁の滯八丁
父の日や白帆と青き海眩し

兵庫 藤田かもめ

露草とミッキーマウス似て非なり
子燕の畴今年も古駅舎
秘仏まで聴耳立つる不如帰
芭蕉ゆかり浮瀬亭跡竹落葉
夕焼の家隆塚に立ちつくし

大阪 藤田京子

ばっさりと伐りし幹より柿若葉
目立たずに酸橘の花が咲き始む
フランスの孫よりメール額の花
不用品捨ててすつきり梅雨晴間
亡き父のこと甦るさくらんぼ

兵庫 史 あかり

さくらんぼ娘時代は速く過ぎて
一点の瑕疵なき桃に刃を当てる
枝豆の茹で過ぎ今日の悔い一つ
山ガール落し文には目もくれず
腹に伏せし本上下する三尺寝

兵庫 古井公代

夏燕おにぎり大き道の駅
生れてすぐ親におびゆる目高の子
千人針植田の針はうす緑
盛り過ぐ藤に的むけ照明器
足もとに風の降りくる梅雨の入り

大阪 古林田鶴子

夫婦らし莢の蚕豆睦じく
手放せずぬて三年目の夏帽子
名の知らぬ初夏の草花散歩みち
黴退治薬あれこれ化学式
潮の香の今宵ひときは梅雨入り前

兵庫 細野 恵久

楓の実を枝ごと揺らし小鳥くる
竹の春保険継続まだ迷ひ
ふれあひて南蛮煙管向き向きに
門前に閻魔蟋蟀昼も鳴く
取組は耳で見るなり栗を剥く

愛媛 松井 洋子

子供傘差し掛けられし大牡丹
寡言なる大家設けし誘蛾燈
ト口箱に特価で売られ未草
相対性理論受売り緑蔭に
四角張る空に大き弧燕飛ぶ

埼玉 松木 清川

箒持つ亡母の姿夏座敷
弥彦タワ―眼下に夏の日本海
さいたまを二日離れて蕨採り
青蘆に見えがくれする赤帽子
梅雨の朝傘を選ぶに迷ひあり

東京 松本 アイ

名園に水車回りて春惜しむ
鯉のぼり連子窓より城望む
立夏すぎ今年の空のささくるる
つつじ道健康談義の花咲けり
夏草は家屋跡地の天下とる

愛媛 松本 恒子

どくだみの匂ひ残りし爪を切る
冷し酒夫の知らざる孫並ぶ
朴の花外階段を登る度
百年家壁塗替へて吊忍
裁判所筭掘りの鍬一つ

愛媛 三浦 澄江

水張りし田に朱鷺色の灯がうつる
ゼリー盛るギヤマン皿は早苗の色
ひなげしに風ありみどり児よく眠り
豪華なる花束にそふ霞草
高速路渋滞の上燕飛ぶ

兵庫 三枝 邦光

地酒屋の上間を透かすや麻のれん
化野の仏の小道竹落葉
茶碗坂風に纏るる夏のれん
野の宮の鳥居にしきり竹落葉
秘めごとの二つや三つ熟れ苺

兵庫 水野 範子

葱坊主自作自演の読み聞かせ
しちだんか茶室に入れば茶人なる
薫風に五感を洗ひ清めたり
紅白の薔薇垣の家人住まず
セ・パ交流投手は汗を衿で拭く

兵庫 水野 弘

孫留守居台風頭上通過中
孫と酌む話しの尽きぬ夏祭
雷鳴や無人の駅に鴉二羽
山の里竹の子下げて友訪ね
街路樹や青葉の走る音の起つ

香川 三橋 早苗

螢火に歓声あがるビル屋上
菖蒲池真中で亀の甲羅干し
写生会どの画用紙も花菖蒲
緑陰に菅公の牛黒光り
誕生日梅酒漬け込む日と決めて

茨城 三輪 慶子

父の忌の間近となりぬ白緋
文庫本の頁くすみぬ太宰の忌
時鳥 尼の墓なる五輪塔
沼に向く木椅子のきしみ青葉風
奪衣婆のうすら笑ひや栗の花

埼玉 向江 醇子

父の日や運転止めし日でもあり
六月の空に憂ひのありどころ
梅雨出水単身赴任の彼の地に
気合入れ包丁研ぐ子夏厨
三十度喜ぶもあり海開き

兵庫 村田とくみ

ひとりでに目を閉づ新茶一煎め
窓格子に靴下ほどの鯉のぼり
若葉風メモ魔とならん物忘れ
ほうれん草灰汁も味なり人に臍
コンテナ庫がんにがらめに蔦若葉

佐賀 森田 子月

飲む人を待ちて冷製スープなり
もぐもぐとウサギ飼いたしレタスかや
隣席のハンバーガーみて冷た粥
ナポリタン紅白旗に風薫る
昼餉前チョコレイトにて夏瘦せぬ

大阪 師岡 洋子

象谷きざだの水はきはきと齒朶若葉
その奥に臥す人のあり葎障子
窓若葉話しことばで手紙書く
星涼し音なく廻る観覧車
葉柳を揺らして通る弓袋

東京 安田とし子

青あらし名画の余韻もちあるく
緑陰に知らぬながらに声交す
湯治場に声のあかるさ路の風
甘酒のとろりと白し標高二千
日焼して戻りもならぬわが齡

鈴の奏

品川鈴子選

夕つばめ子等は塾へと急ぎ足
兵庫 荒木 稔

鎌止むや殻やはらきかたつむり

万緑の喝采を浴ぶ朱鷺のひな

蟻走る地盤沈下の造成地

走り梅雨たらたら季寄せ繰るばかり
兵庫 中村 吟子

競技会無心の子等は玉の汗

峰雲の甲冑まとふ松江城

万緑の山に続けり丹波道

殉職高女引率の新垣先生の恩師故山に沖繩忌
福井 木曾 鈴子

デイケアにも苛めあるらし梅雨籠り

荒梅雨や庭の那智石流れさう

虎が雨夜半に螢を濡らす音

歩くだけのプールなれども恙なし
兵庫 吉田 耕人

耳鳴りのごと春潮の迫り来る

虹の脚架橋袂に失せたるや

父も師も厳しかりけり麦の飯

山門に利休の気配青嵐
兵庫 中村 紘

濡れ縁に足投げ出して苔の花

ヨーデルに合はす手拍子風薫る
朝ぐもり鴉の声のけたたまし
サングラスかけて出て行くから元氣
兵庫 堀口香代子

挨拶が宙に浮くなりサングラス

青山椒自己主張する子らに似て

青山椒露をみどりに染めてをり

樟若葉衛士の守りたる裏参道
兵庫 大西 和子

青葉風足踏みしめて太鼓橋

花卯木神苑を行く嫁ご寮

梅雨の入り土師器はじにならぶ宋の磁器

冷奴肴に父を恋う話
兵庫 岡田満喜子

神戸らし泰山木の花通り

庫裡の縁わがもの顔に羽抜鶏

枇杷の実を食ふことなしに家を越す

フエンスより細き腕入れ夏わらび
兵庫 長谷川とし系

床で聞く午前三時の時鳥

嘶家が切り絵すらすら浅き夏

葎の花室外機の下にひっそりと

秀 鈴 記

蟻走る地盤沈下の造成地

荒木 稔

人間が自分達の都合で開発という名のもとに自然の海辺や山野の形をどんどんと崩して変えてゆく。多くは水辺を埋め立てて平地を広げ地域を活性化させた筈だった。

だが思いがけない地震や洪水に遭ってみると、人為で築いた地盤は液化化などで沈下し易いことが解った。

地中に巣穴をもつ昆虫類はいち早く地球の異変を感知して大騒動。当事者の人間ばかりか、工法の脆さに、逃げ惑う羽目となった。

走り梅雨だらだら季寄せ繰るばかり 中村 吟子

梅雨の前触れか、早々と雨が数日続くと、湿度の所為か万事が鬱陶しくて何も手につかない。そこで気の向くままに過ごし、句も作らないのに「季寄せ」をあちこち捲っているだけの自分。心を空っぽにして、指に馴染んだ「季寄せ」を捲るのは楽しい。名句はこんなとき浮かぶのかもしれない。

れない。

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 大空 純子 //

*選句は全て 品川鈴子

殉職の恩師故山に沖繩忌

木曾 鈴子

かつて沖繩の激戦で第一高女生を引率の新垣先生が殉職なさった日のことは、いまだ脳裏に鮮やかなまま。ふるさとの山を訪ねて恩師を偲ぶことができた今年の沖繩忌。

耳鳴りのごと春潮の迫り来る

吉田 耕人

春の海といえはひねもすのたり、その波の音が迫り来るという。穏やかに過ごせぬ何かを抱えているのか、それとも波のノイズに聞き入っているのか。過去も未来も考えず海に佇む今、耳鳴りをもα波に変えてゆくように思える。

山門に利休の気配青嵐

中村 紘

草木を揺り動かす青嵐、その奥には草庵風の茶室でもあ

るのだろうか、時の人に影響を与え、ともに民衆にも茶道を根付かせた利休、その気配を感じる山門は自然の中に溶け込んでいるのでしょうか。戦国時代に侘茶を嗜む風景をも思わせる。歴史を顧みる雄大な作風。

サングラスをかけて出て行くから元氣 堀口香代子

サングラスは目を保護するのが目的でしたが今やファッションアイテムの一つ。意欲は湧かない時、せめて見た目八割とサングラスをかけ気風よく装う。
心を覗かれることを嫌い気分転換にと外出して、元氣になつてはるはず。

青葉風足踏みしめて太鼓橋 大西 和子

何とも心地よき風。川を流れる水も輝き若々しき生命力を育む木々。

太鼓橋を見るとなぜか渡りたくなる、歩くとなかなか歩みにくい。平坦な道だと気にならない足裏の体重移動、一歩一歩をゆつくり進む。非日常の感覚は若返りの秘訣かも。

冷奴肴に父を恋う話 岡田満喜子

世の男性にすれば娘に慕われるという羨ましい話。娘の出来は何処とも幾つになっても可愛い。と、伝える術はあるのだろうか。父は今酒の肴になっている。季語の冷奴が作者の、さばさばした人柄を思わせる。薬味は生姜に七味流行のドレッシング。お好みの恋の話に合わせてみては。

葦の花室外機の下にひっそりと 長谷川としゑ

葦の花は一センチぐらいの白い小花が球形に咲く、葉は雑草のようであるが花が咲くと存在を現す。昆虫も飛んでくる、室外機の風に揺れているのだろうか。しかし人日に付く場所に植え替えられることはない。どこに咲いても花を愛おしむ作者の気持ち伝わってくる。

春霖や施設の母に下着買ふ 沖 則文

介護保険制度も始まりあの頃より施設の数が増えてきました。しかし長寿社会に問題は山積です。生きるには衣食住は必要。幾日も続く静かな雨。母に何かできることはないかと肌着を買いに行く。真つ新の肌蝕りを母は微笑んだらうか。
(以下略)